

# 岡崎嘉平太記念館



## だより

Vol. 21

明治維新に活躍した人々

— 世界情勢をとらえながら、日本の将来を考え行動した若者をふる里の子どもに伝えたお話

右の図は、嘉平太氏が吉備中央町立大和中学校へ贈られた写真です。「明治維新に活躍した人々」と自筆で記されています。今春、吉備中央町立の四中学校が統合し、加賀中学校が新設されました。そこで吉備中央町教育委員会より当館へ大和中学校で大切に保管されていた右の写真額が寄贈されました。嘉平太氏は昭和四十一年一月号「おかやま」に、明治維新を遂行した人々の英知、努力、精進に感謝し、昭和に生きる自分たちも新しい英知、努力、精進をする時期としたいと寄稿しています。

この写真は、昭和五十八年十月に嘉平太氏から大和中学校へ贈られたそうです。ふる里の多感な若人たちへの願いが込められているのかもしれない。

放眼世界 懐胸祖国



## 西郷隆盛 — 敬天愛人 —

友人にも敵にも深い情けをかけた西郷隆盛

：私は西郷隆盛という人が非常に好きなんです。どこが好きなんだっていうと、西郷隆盛という人は常に相手の身になって考え、自分のことを第二義においているという感じのする人なんです。ね。(中略)西郷隆盛は明治維新をやったときに、江戸城を落とした後、北の方へ攻めていきますね。太平洋側と日本海側の二隊で官軍が攻め上がるんですが、山形の酒田を攻めたことがあります。そのときに酒田城の城主は、戦わないで降参して城を明け渡したわけなんです。が、いよいよ城を明け渡すという日に、西郷隆盛は薩摩の兵隊の指揮者に全部家の戸を閉めさせて、道で警護にあたる侍は全部後ろ向きに立たせて、お城を出てきて落人になる殿さまおよび家臣の顔を見せなかった、ということなんです。(中略)だれだって、降参して出る顔をジロジロ見られるぐらい恥ずかしいことはない。それを隆盛は知っているから見せなかった。(中略)それが酒田藩の心をとらえ、のちには若い侍が命を捨てても隆盛の恩に報いることになった。後ろ向きに立たせたぐらいのことがなんだ、といえはそうなんですけれども、苦しかった人が感じるのは大変なもので、命まで隆盛までのために出すということができるわけですね。

(昭和五十三(一九七八)年十月六日に全日空整備(株)清和台研修所開所式での嘉平太氏のご講演「相手の身になって考える—人間の最高で最低のモラル—」より抜粋)

明治元年、明治新政府が江戸幕府の勢力を一掃した戦いが起こり庄内藩(今の山形県)は江戸幕府の方について戦っており、降伏に至りました(戊辰戦争)。庄内藩は江戸にあった薩摩藩の邸宅を焼き討ちしたこともあり敵しい罰があるだろうと覚悟していましたが、新政府軍の参謀黒田清隆は、西郷隆盛の進言により寛大に行いました。後に庄内藩の人たちは、はるばる鹿児島まで西郷を訪ね、教えを請い、西郷の思想を「南洲翁遺訓」という書物をまとめ、今に伝わっています。



## ■加賀中学校開校記念「岡崎嘉平太記念館新所蔵品展～若者達へのメッセージ」

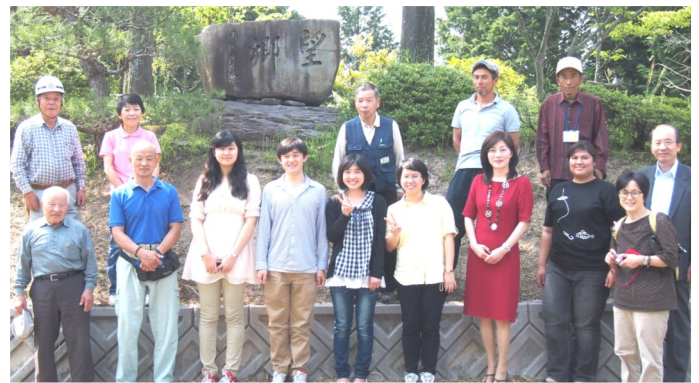
平成26年4月9日(水)～20日(日)

加賀中学校の開校により、平成26年3月末で閉校を迎えた町内の中学校へ嘉平太氏が贈られた書額等が、吉備中央町教育委員会を通じて当館に寄贈されました。これらの新寄贈品を中心に15点を紹介しました。

## 岡崎嘉平太国際奨学財団24期生来館

平成26年5月30日(金)

岡崎嘉平太国際奨学財団第24期奨学生、中国本土や台湾、インドネシア出身の4名が来館し、嘉平太氏の功績を学ぶとともに、嘉平太氏を偲び、墓参をしました。また、嘉平太氏の母校・大和小学校の児童との交流、地元の方々のお手伝いを受け大和山山頂へのヤマザクラの植樹等を通じ、嘉平太氏のふる里の方々と楽しく触れ合いました。



### ▲ 植樹の応援団の皆様と

左上から順に、大崎さん、上田さん、富岡さん、森田さん、加藤さん。左下から前田さん、上田さん(以上、地元の方々)、奨学生の張さん、王さん、李さん、Eikoさん、奨学財団を支援されている白井さん、11期生で現在はヤンゴン大学教員のケイさん、事務局の三橋さん、神原当館館長

左側は大和小学校での様子。日本の給食を頂いた後、全員遊びを児童と一緒に楽しんだ。右上は望郷の碑の前で地元の方々と一緒に。右下は、植樹の様子。

## 「第8回嘉平太が愛したふるさと岡山写真展」入賞者の表彰と展示

応募のあった156点を審査員の長瀬正己先生、森山知己先生、当館館長で審査し、16点の入賞作品が決まりました。結果は、下表の通りです。

平成26年5月18日(日)に表彰式を執り行いました。長瀬先生は、「写真は光りに撮らせてもらっている。光りとの出会いを求め何度も足を運ばれたことでしょう。応募作品の全体が構図、写真の組み方、プリントの質など技術の向上が顕著で、審査が大変難しかった。そのなかで、表現したいことを考え、掘り下げてあると感じた作品が選ばれた。」と述べられました。

最優秀賞＝神崎由子「桜、独り占め」 優秀賞＝芝 次昇「春の輝き」 / 北川隆司「幽玄閑寂」  
審査員特別賞＝白井 寛「清流」 / 中原廣明「雪の夫婦岩」 / 石原一夫「明るく元気な少年達」  
入選＝隈部政秀/久山智二/小出まゆみ/斉藤雄幸睦/杉本小銀/高橋克美/難波啓二/前原 勲/  
松原満子/ 松本ケンイチ (敬称略、五十音順、入賞は氏名のみ)

展  
示

岡崎嘉平太記念館 →→→ 5月3日(土)～7月5日(土)まで156点展示

岡山天満屋地下タウンアートスペース →→→ 7月9日(水)～14日(月)まで100点展示

## 岡崎嘉平太著『サラリーマンの人生経営』の紹介～1回目



入手が難しい本著を嘉平太氏の文章を抜き出して、数回に分けて紹介します。若いサラリーマンに向けて書かれたものようです。これまで考えてもみななかった価値観や心の持ち方と出会い、考えや生き方を深めるための一助となるかもしれません。

本書は、実業之日本社より昭和35年11月(嘉平太氏63歳)に初版され、座談会の記録や随筆から構成されています。発刊の経緯は、本書の「あとがき」に読んでとれます。

戦後、私は新聞や雑誌の求めに応じて、座談会に出て話したり、若干の随筆を寄稿したりした。ところが最近、実業之日本社から、これをまとめて1冊の本にしたいとって来た。しかし、その時々私の述べたり書いたりしたことは当時としては、私のいただいていた率直な考え方にはちがいないが、時が経過すると、随分恥ずかしい思いのものもあろうかと躊躇したのである。

しかし、座談会で話したことは、多くの場合若いサラリーマンを対象としている。私自身の体験からえたものを飾り気なしにお話ししたつもりである。現在の若い人たちの生活に合うかどうか分からないが、人生遍路としては、かなり変化の多い私の半生の体験は、ぜひ若い人たちに聞いてもらいたいと思うことが多い。そこで私は勇気を鼓して、この本をまとめることをお任せしたというのが、この本が出版されるにいたった経緯である。

この本を読まれる方々の御迷惑に対しては、ここにあらかじめお詫を申し上げて、大方の寛恕を乞う次第である。  
昭和35年10月 岡崎嘉平太

嘉平太氏は、岡山県立岡山中学校(現、岡山県立岡山朝日高等学校)からの親友、杉山久夫氏を交いして、原田 親氏(岡山県立岡山朝日高等学校初代校長)に望まれ、本書を恵贈されました。その際に「あとがきからご覧ください」と文を添えられたそうです。原田氏は、岡山県教育時報昭和36年1月号のBook Reviewに「謙虚な人生経営の教訓」と題して本書を紹介され、「こういう良い本を他にすすめるということ自体が、喜ばしい義務の遂行である。私はさっそく1冊買って、近くに就職する甥へのプレゼントとすることを決めた」と記されています。

■サラリーマン生活を楽しくする工夫から抜粋・・・この部は、「職場の楽しみ・家庭の楽しみ」、「豊かなる生活への希望」の二つの見出しで、16頁にわたり記されています。

若いころから、人間の本质をつかむ修練を積んで、人を見る目をやしなう。いつか、自分が人の上に立った場合、この修練ができていると適材適所に配置ができ、これが見事にあたった場合、自分がほめてやる相手をつくるほど楽しいものはない

いやな仕事をあたえられたときは、物の本質をきわめ、本来の面目をさがすことを考えることができれば、仕事への不快感や嫌悪感をなくすことができる。「楽しみ、おのずからそのなかにあり」

艱難汝を玉にす、自ら苦勞を買つてでる勇氣、自ら一番苦勞なところへ飛び込み努力する。そして、「窮すれば通ず」苦しい立場に追い込まれることを覚悟し、そこを突き破る努力をし、やがてそれが実をむすぶときのよろこび、楽しみこそ、人生の真の楽しみである



編集・発行：岡崎嘉平太記念館

〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川4860-6 きびづら内

TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066

ホームページ <http://www.okazaki-kaheita.jp>

Eメール [okmh@okazaki-kaheita.jp](mailto:okmh@okazaki-kaheita.jp)

2014年6月発刊